

そよかぜだより

第80号
発行 2009. 1. 18
毎月1回発行
NPO 法人
障害者団体連絡会
そよかぜ

http://www.mmjp.or.jp/soyokaze/
連絡先
ひばり園 578-0855
FAX 578-0466
くれよん 578-2575
つくしの家 578-0855
あおぞら 570-6110
Eメール 570-1233
資源回収時のご連絡は
「ひばり園」へ

あけまして おめでとうございます

本年もよろしく
お願い申し上げます

新年明けましておめでとうございます。皆様には、つづがなく新年を迎えられたことと思えます。東日本の各地は、天候も穏やかな日となり、初日の出が見られました。このうした穏やかさとは裏腹に、昨年後半に始まった米国の金融危機は、今や全世界に広がり、日本でも百年に一度とも言われる経済不況の嵐が吹き荒れる幕開けとなりました。

こうした中で私たち「NPO 法人そよかぜ」の運営につきましましては、おかげさまで会員皆様のご協力を始め、行政当局、企業、団体、市民皆様の暖かいご支援、ご指導をいただきながら、授産事業をはじめ各事業を進めることができました。とりわけ西多摩地域としては、初めての「障害者就労支援センター・Eメール」が開設され、羽村市当局からの受託により事業を開始できたことは、今後、障害者の一般就労の機会を広げられるとともに、安心して働くことができる環境整備に大きな前進があるものと考えております。さて、今年、「そよかぜ」にとって大きな転換期を迎える年となります。それは長年の懸案でありました、国庫補助による新施設の建設が、平成20年度から21年度にかけて始まり、併せて新しく社会福祉法人に生まれ変わるからであります。現在、建築確認、工事発注、法人認可など2月中旬に向けて大詰めの事務作業を進めておりますが、

そよかぜ 理事長 野崎功市

2009年、年頭にあたって、新年のご挨拶
特定非営利活動法人障害者団体連絡会

ご協力ありがとうございました。 12月の募金 115,171円
(順不同) 平成20年4月～12月の合計 536,262円

居酒屋たんぼぼ	様	並木 宏悦	様	井上 誠一	様
小谷野 美智子	様	加部 妙子	様	内田 洋子	様
エイ・アイ	様	佐藤 佐夫	様	小林 幸一	様
とまと美容室	様	高橋 典子	様	田中 明子	様
阿部 光子	様	加藤 春花	様	北野 浩美	様
帯刀 進	様	加藤 夏花	様	清水 賢	様
宇津木 牧夫	様	加藤 和輝	様	清水 知子	様
込宮 正夫	様	濱野 岬	様	森田 勝	様
山下 暉枝	様	古沢 奈保美	様	大野 元雄	様
天満 喜代子	様	村野 理子	様	山田 隆章	様
石堂 孝一	様	土屋 三枝子	様	橋本 亜紀子	様
袴田 実	様	川崎 利男	様	平岡 知子	様
榎本 正代	様	清水 キヨ子	様	長谷川 キヌ子	様
松岡 竹子	様	尾又 恭子	様	関谷 孝子	様
角野 克子	様	角野 満壽子	様	本間 正彦	様
国本 昭治	様	山崎 六雄	様	大野 素子	様
渡辺 四郎	様	斉藤 忠	様	関村 理	様
下田 コウ	様	柴田 佳代子	様	関村 英希	様
大内 たま子	様	小沢 達子	様	関谷 博	様
阿部 郁子	様	山影 幸子	様	田中 稔	様
平野 嘉子	様	ア-サロンカワノ	様	桜沢 喜作	様
ア-バンデックス	様	匿名様(26,677円)			

ご連絡は、ひばり園へ
羽村市五ノ神2-6-7
042-578-0855
くれよん12月の売上げ
920,900円でした。

羽村市内の小学校と中学校の生徒のみなさんが、各学校単位でプルトップ収集にご協力して下さっています。ありがとうございます。

これまでに至る長い間、並木市長をはじめ市当局並びに関係者の方々には、本当に暖かいご支援、ご指導をいただき、心からお礼を申し上げる次第です。いずれにしても、今年、こうした新しい事業への取り
(2面につづく)

NPO 法人 そよかぜの

《資源回収》に

ご協力をお願いします
新聞、雑誌、ダンボール
(ボロは扱っていません)

12月は17,500tでした。金額は355,075円となりました。この収益は、NPO法人そよかぜの運営資金になります。みなさまのご協力ありがとうございました。

2月は第3日曜日15日です。

大雨の場合は、次週の日曜日に順延します。

組みとともに、従来の授産事業、グループホーム事業、リサイクルショップくれよんや宿泊訓練施設つくしの家運営、古紙回収事業など一層の充実を図らなければならないものと考えております。

しかし、自動車産業の低迷による急激なベアリング加工の受注減や古紙単価の下落など事業内容によりましては、大変厳しい運営が予想されますので、あらたな視点に立つて工夫改善を図り、飛躍できるような理事、職員一丸となつて努力して参りたいと考えております。

どうか、本年も関係者皆様の変わらぬご支援、ご協力をお願いし、新年のご挨拶とさせていただきます。

平成二十一年一月吉日

母親の仏壇に両手を合わせる息子

それを見る父親が思うこと

去年の年末に息子を迎えに施設へ行ったとき、施設の職員から「お宅では、何か仏教系の宗教でもされていますか？」と聞かれました。思いがけない質問だったので「えー、なぜ」と聞き返すと、「息子さんがときどき両手を合わせて祈るような仕草をするので、家で何か教えているのかなと思いました」ということです。

そう言われて私は「はー、そうだと」すぐ思い当たりました。我が家は残念ながら無宗教で何もしていませんが、夏休みやお正月休みに息子が家に帰ってきたときはまず最初に、この子の母親の位牌を置いてある仏壇に向かって両手を合わせています。私の家内は20年前に亡くなりまして、重度障害の息子にはそのことが分からず、家に帰ってくる母親を探していたので、人が死ぬという意味をなんとなく分からせてやりたいと、位牌に向かって手を合わせて

「これがお母さんだよ」と教えたことが習慣になって、いまでも同じようにしているのです。

お正月が近くなって、職員が「もうすぐお父さんが迎えにくるよ、家に帰るんだよ」と教えたのでしよう。それを聞いて息子は、家に帰ること、両手を合わせるのだと思つてそのような仕草をしたのだらうと思います。そのことを説明すると、息子よりずっと歳の若い職員は「へー、そんなことがあるんですか」と驚きながら「そうか、知的重度の人には、生きているものが死ぬという意味は分からないでしょうね、だからお母さんを探すのでしょうか」と実に神妙な顔つきでうなづいていました。生まれてから二十歳近くになるまで、母親はいつも必ず自分のそばにいたので、それが当たり前だと思ひ込んでいたわけですから、急になくなることは確かに理解できないだらうと思います。

それでも5、6年過ぎるとさすがに探してもむだなことが身に沁みてくるようで、いまではもう探すことはなくなりました。ただ帰ってくるたびにいつものように手を合わせます。その姿を見ながら、職員に言われたこともあって、20年前のことが改めて思い出されました。息子は重度の知的障害と同時に難治性のてんかんという病気を持っているもので、よほど慣れた人でなければ介護できません。家内は生きていた頃「自分でなければこの子のことは分からない」と決め込んでいました。だからガンでもう先がないと分かったとき「私が死んだらこの子は必ず施設に入れるよ」と言い残して逝きました。末期ガンの痛さや苦しみはひとこともなく、言うのは残していく息子のことだけでした。

いつのことだか忘れましたが、ある登山家がテレビでしていた話を思い出しました。パーティを組んでヒマラヤ登山をしていたとき、仲間の女性隊員がクレバスに転落しました。クレバスに落ちれば必ず死ぬというのが登山家の常識だそうです。落ちた女性隊員は氷の壁にピッケルで身を支えながら上に向かって大声で叫びました。「宮川さん、宮川さん(隊長の名前)、来ないで、来ないで、あなたには奥さんがいる、お子さんがいる、ここはあぶないから来ちゃあだめ、私はここで死ぬから」この声を最後にして、彼女は数百メートルに達するクレバスの底へ転落していきましました。必死で救出作業の準備をしていた隊員達は救出をあきらめました。それから毎年、その時期になると隊員達はクレバスの近くまでいって花を供えるのが仲間内の恒例行事になっているそうです。

この話を聞いて「そうか、人間はこんな死に方ができるものなのか」と大きな感銘を受けました。そういえば、あつたナチスのアウシュビッツ強制収容所の中で、他人の子供の命と引き換えに笑顔で死んでいった神父の姿が「夜と霧」に印象的に描かれていることもあります。死の淵に立たされても人のことを考えて逝く姿です。

私の家内は、女性隊員や神父ほど崇高な精神を持っていたわけではありません。しかし、親としてやむにやまれぬ気持ちから、死の間際にも自分のことより息子のことだけ思つていたわけですから、同じことかもしれません。その結果としていま目の前で両手を合わせる息子の姿があることになりました。

新年早々、死の話は縁起でもないと思われられるかもしれませんが、これは死の話題というよりも、このような思いで逝った人の気持ちを大切に生き残った者は命を大切にしなければと、命の尊さをテーマにしたもののご理解いただいて、ご容赦をお願いいたします。不況のせいかもしれませんが、ついに家に閉じこもつてこんなことを考えた次第です。